

# マッレー版 TAT 図版の起源についての一考察

—— Morgan 論文の翻訳に基づいて ——

齊藤 文夫・浦田 洋\*

## A Consideration on the Origin of Murray's Thematic Apperception Test Pictures : On the Basis of the Translation of Morgan's Article

Fumio SAITO and Hiroshi URATA\*

### 要 約

これは、ハーバード大学心理クリニックにおける TAT 誕生の経緯について若干の論述を添えた上で、Wesley G. Morgan 著「TAT 図版の起源と歴史 (Origin and History of the Thematic Apperception Test Images)」と題する論文 (1995 年, Journal of Personality Assessment, vol. 65, no. 2, pp. 237 - 254) を抄訳し紹介するものである。同論文は、TAT 図版作成当時の文献資料を丹念に検索し、マッレー版 TAT 図版の原典を考証したものである。同論文は、Morgan や Thal が描いたものと長らく信じられていた図版のいくつかには、そのもとになった原画が存在することを明らかにし、また、「出典不明」とされてきた第 20 図の原典を発見するなど、TAT 図版の成り立ちに関するいくつかの興味深いことを述べている。この論文の第 I 部「まえがき」は TAT の成立に関する筆者らの論述であり、第 II 部が上記論文の抄訳である。上記論文の翻訳を快諾していただいた原著者及び著作権を有する Lawrence Erlbaum Associates, Inc. に対し、心からの謝意を表す。

キーワード：TAT

---

\* 岐阜少年鑑別所, Gifu Juvenile Classification Home

## 第I部 ま え が き

今日われわれが用いている TAT 図版は、1943 年にハーバード大学出版局から刊行されたものである。それは、創案者とされるマァレー (Murray, H. A.) 又は版權を有するハーバード大学の名前にちなんで、マァレー版又はハーバード版 TAT と呼ばれている。

創案者とされるマァレーはもともと医学を志していたが、英国留学中に読んだユング (C. G. Jung) の「類型論」に深い感銘を受けたことから、チューリッヒに赴きユングと会見し、心理学者となることを決心したという。それは、1925 年、彼が 32 歳のときであった。その後、かれは英国のケンブリッジ大学で博士号を得て、アメリカに帰る (木村, 1989, pp. 123-124)。

マァレーがハーバード大学心理クリニック (The Harvard Psychological Clinic) の所長に就任したのは、1928 年 (木村, 1989, p. 124), あるいは 1929 年 (山本, 1992, p. 3) のことである。そして、1930 年代、かれを首班とするハーバート大学の若き俊英ら (この中には、ライフ・サイクル論のエリクソン、P-F スタディのローゼンツワイクなどもいた) は、人格査定の研究に邁進する。その研究の集大成として世に問われた大著が「人格の探求 (Explorations in Personality)」(1938 年初版) である (Murray, 1938; 外林訳編, 1961)。これは、当時における人格研究のひとつの到達点を示す画期的な著作であり、アメリカ心理学の「記念碑 (a landmark)」(Cramer, 1996, p. 11) ともいわれ、その後の人格査定の研究に大きな影響を与えた。

この著作の中で、人格を査定するためのさまざまな新しい技法が考案・検討されており、そのひとつが TAT であった。ここにおいて、TAT は人格査定法として広く世に知られることとなった。

この当時用いられていた TAT 図版は、今日のマァレー版 TAT の図版とはかなり異なったものであることが知られている。1930 年代後半から 40 年代初頭にかけて、クリニックでは、投影 (映) 法に活用できそうなさまざまな予備図版が試行されていたにちがいない。その数は数百枚あるいはそれ以上であっただろう。それら多数の試行図版あるいは予備図版が取捨選択され、さまざまに手直しされて、現行の TAT 図版が出来上がったのであろう。

しかし、その経緯について、筆者らはほとんど無知である。現行の TAT 図版 (1943 年初版) は、一体何を素材とし、どのようにして出来上がったのだろうか。この点については、わからないことだらけであるといってもよい。最も標準的な TAT の教科書とされ、1954 年の初版以来、数次に及ぶ改訂増補を続けているベラックの著作 (Bellak, 1993) にも、各図版の作成・選定の経緯についてはほとんど記されていない。

クリニックのスタッフが多数の写真や絵画から取捨選択していったのであろうとは想像される。しかし、具体的に、どのような絵画や写真をもとにし、どのような加工を施して、31 枚の TAT 図版が確定したのであろうか。創案者とされるマァレー自身は、TAT 図版に添付された手引書

で「TAT 図版は, 1936 年にハーバード大学心理クリニックで最初に考案されたものを 3 度改訂して作成された。我々は, この図版が最終決定版となることを望んでいる」(Murray, 1943, p. 2) と, あっさり述べているだけである。この点について, 佐野・楨田 (1958, p. 27) は, 率直に次のように述べている。

「一寸興味を引かれる事は, Murray が如何なる理論の下に, 如何にしてあの様な図版を選んだか, その図版の選択, 構成について全くふれていないことである。或いは寡聞にして知らないのかも知れないが, この点について, 御存知の方があったら教えていただきたい。」

筆者らもまた「寡聞にして知らない」。そして「御存知の方があれば教えていただきたい」と, かねがね思っていた。わが国における主要な TAT 関連の文献も, その点については全く触れていないからである。

そうした筆者らの疑問に答えてくれたのが, ここに紹介する論文である。この論文は, 当時 TAT 図版の作成にかかわったクリニックの研究者で生存している人たち (R. R. Holt, M. I. Stein, S. Rozenzweig) からの助言を得るとともに, ハーバード大学文書館に保存されている「ヘンリー・A・マラー資料集」を検索した上で, さらにそのころ刊行されていた画集, 写真集その他の出版物を丹念に調査し, どのような絵画や写真をもとに TAT 図版が作成されていたかという過程を, 考証したものである。

さまざまな興味深いことが「発見」されている。例えば, 手引書では「Morgan 女史の筆による」とされている 6 枚の図版 (1, 3 BM, 6 BM, 12 F, 14, 18 GF 図) には, (少なくとも, そのうちの数枚には) 原画があったこと, Thal が描いたとされる図版についても同様であることなどが明らかにされ, また, 手引書では長らく「出典不詳」とされている第 20 図についても, そのもとになった写真が発見・報告されている。

そうした考証の一つひとつが, 筆者らには興味深いものであった。この論文を読みつつ, あらためて TAT 図版を 1 枚ずつ見直し, TAT に対する関心がさらに増した。わが国の犯罪・非行臨床の分野では, 安香・藤田 (1997) や坪内 (1984) を代表として, 伝統的に TAT を好んで活用する実務者が多い。そうした伝統を受け継ぐべき筆者らとしては, 本論文を訳出・紹介することは大きな喜びである。筆者らはまた, この論文を訳出することは, わが国の TAT 実務者・研究者にとって意義あるものと確信する。

#### 参考・引用文献

- 安香 宏・藤田宗和 1997 臨床事例から学ぶ TAT 解釈の実際 新曜社  
Bellak, L. 1993 The TAT, CAT, and SAT in clinical use, fifth edition. Needham Heights, Mass.: Allyn and Bacon.  
Cramer, P. 1996 Storytelling, narrative and the Thematic Apperception Test. New York: The Guilford Press.  
木村 駿 1989 マラーの欲求・圧力理論 本明 寛編 性格心理学講座第 1 巻「性格の理論」所収 pp.

123-136. 金子書房

Murray, H. A. 1938 Explorations in personality. New York: Oxford University Press. (外林大作訳編  
1961 パーソナリティ I, II 誠信書房)

Murray, H. A. 1943 Thematic Apperception Test manual. Cambridge, MA: Harvard University  
Press.

佐野勝男・槇田 仁 1958 精研式主題構成検査 (TAT) の評価方法 精神医学研究所

坪内順子 1984 TAT アナリシス 垣内出版

山本和郎 1992 TAT かかわり分析 東京大学出版会

## 第II部 TAT 図版の起源と歴史 (抄訳)

テネシー大学 ウェスレー・G・モーガン著

(注) 翻訳にあたっては、次の要領によった。(1) ほぼ全訳であるが、図版についての説明などは省略した。(2) 達意を旨とし、なるべく平易な意識に努めた。(3) 分かりにくいと思われる箇所には若干の補足を加え、また冗長と思われる箇所は簡略な表現とした。ただし、読み下しやすさを旨としたため、そうした箇所にいちいち注記を加えなかった。(4) 原論文にある引用文献は67点であるが、紙幅の制約があったため、ここでは省略した。

### 第1節 序 論

本論文では、1943/1971年版のTAT図版の原典を一つひとつ検討する。現在我々が使用しているTAT図版は、1936年にハーバード大学心理クリニックが創案した「絵画統覚検査 (Thematic Apperception Test, TAT)」の「改訂第3版」であるとされる。それは、ハーバード大学出版部で印刷され、広く一般的に用いられるようになった心理検査である。Murrayはこの最終的な改訂第3版を「Dシリーズ」と呼び、それ以前の試行的な図版 (Holt, 1946; Rapaport, Gill, and Schafer, 1946) と区別している。A, B, Cシリーズと呼ばれる試行図版は台紙に写真を糊で貼りつけたものであった。それに対し、Dシリーズは厚紙に印刷された最初の図版であった。Dシリーズが印刷されたということは、おそらくこの図版 (改訂第3版) が広く使用されることを予想してのことだったのだろう。

Murstein (1963) によると、Murrayは次のような方法でDシリーズの図版を選定していったという。当時Murrayが所長をしていたハーバード大学心理クリニックのスタッフは、14歳から40歳までの者 (人数ははっきりわからない) を被験者とし、かれらの人格特徴を「かなりの時間をかけて」、さまざまな心理検査を用いつつ、詳細に検討した。それらの結果を総合して、各被験者の人格特徴についての最終的な診断が下された。その上で、被験者に施行した何枚ものTAT試行図版を一つひとつ見直し、被験者の人格診断に有用な情報をどれくらい引き出すこと

ができたかという観点から各図版を評定し、有用な図版を取捨選択していった。かくして、人格診断のための情報をたくさん引き出すような図版、つまり「刺激力」の大きな図版だけが残されていった。

そうした手続きで今日の TAT 図版が選定されていったのであろう。しかし、さらに詳しく図版の起源をたどっていくと、以下に述べるように、いくつもの興味深い事実が判明する。

図版の起源を知る上で、TAT 図版そのものに添付された手引書 (Murray, 1943/1971) が 1 次的な資料であろう。しかし、残念なことに、この手引書は 1943 年以来全く改訂されていない古いものである。しかも、そこに記載されていることは不完全で、正確さを欠いていることが分かってきた。本論文ではこれらの欠点を改め、図版の出典をより完全な形で確定していきたいと思う。

ところで、TAT 技法において提示される図版と被験者の反応との関係を考えてみると、TAT 図版の刺激特性そのものが反応 (被験者の知覚) に何らかの影響を与えているにちがいないと考えられる。この点について、Murstein (1972) は、次のように述べる。

「客観的に見て TAT 図版にはそもそも何が描かれているのかということを、検査者は知っておく必要がある。それが分からなければ、検査者は、被験者の主観 (パーソナリティや心理力動) が TAT 反応にどの程度に投影されているかが判定できないであろう。また、刺激図版がもともと何であるかを客観的に知っていなければ、どのような反応が標準的な反応であるかを判断することもむづかしい。」

TAT の標準反応については、いくつもの研究がなされてきた (Holt, 1978; Murstein, 1972; Rosenzweig and Fleming, 1949)。しかし、ここで筆者は、そうした研究とは視点を変えて、TAT 図版そのものがもともと何であったかということの問題としたいのである。それを知ることこそ、まず重要であると思うからである。

序論の最後に、次のことを付言しておきたい。TAT 図版の原典となった絵画や写真は、画家なり写真家なりが自らの思想や感情を人々に伝達しようと意図して創造したものであって、もともと投影 (映) 法の道具として作られたものではない。TAT 図版を活用する我々は、そのことを忘れてはならないだろう。

## 第 2 節 著作者の問題

TAT 図版の原著作者は一体だれであるのかという問題について、若干のことを検討しておきたい。

TAT に関する最も初期の論文は、Christiana D. Morgan (1897-1967) と Henry A. Murray (1893-1988) が連名で発表した論文であり、そこでは Morgan が第 1 著者となっていた (Morgan, 1938; Morgan and Murray, 1935, 1938)。また、そのころ用いられていた B シリーズは「Morgan-Murray 絵画統知検査」と呼ばれていたという証言がある (White, Sanford,

Murray, and Bellak, 1941)。しかるに、その後作成されたDシリーズの手引書では、TATの著者は「Henry A. Murray 博士とハーバード心理クリニックのスタッフ一同」となっている。

もともとの論文ではMorganが第1著者であったのに、なぜ彼女の名前が1943年版(Dシリーズ)の手引書では削除されているのだろうか。Dシリーズの図版の多くは、クリニックのスタッフらの助言によって選択・採用されたものであったことが知られている。Murray自身は、Morganのほか、Sanford, Wyatt, Rueschらの貢献が大きかったとしており、1943年版の手引書には、Rapaport, Sanford, Shakow及び「その他のスタッフ」という形で言及されている(Murray, 1943/1971)。さらにその後、Murray(1965)は、White, Tomkins, Bellak, Stein, RosenzweigらがTATの作成に貢献したとも述べている。このように、時の経過とともに、さまざまな関係者の名前が掲げられる一方で、創成期には中心的な役割を果たしていたMorganの名前は次第に薄められているように見受けられる。

初期の試作段階から用いられていた図版の中にはMorganの筆になる絵もあった。しかし、それらの図版のうちの何枚かは、Dシリーズの作成に際して、画家Samuel Thal(1903-1964)によって描き直されている。描画の才能のあったMorganの絵を破棄し、わざわざ別の画家に描き直させたのはなぜだろうか。その理由は今でも分かっていないが、ここにもMorganの貢献を薄めようという意図が働いていたのかもしれない。

Dシリーズが開発されている時、Morganの健康状態はすこぶる悪かったことが分かっている。彼女は長年高血圧に悩んでおり、最後には、それを根治するために交感神経切除術を受けた。その手術の正確な日時は明らかでないが、最も確からしい日付は1943年11月である。そして、ちょうどそのころ、Dシリーズが出版されている(Douglas, 1993; Robinson, 1992)。

Douglas(1993)は、原著作者としてのMorganの名前が消えていった理由は当時の学界における女性差別であったとしている。ただし、Murrayによれば、Morganは健康上の理由からもはやTATの研究を続けることはできないとして、原著作者としての自分の名前を削除することを彼女自身から求めてきたという(Anderson, 1990; Murray, 1985; 1993年7月29日付けC. C. Murrayの私信)。そのようなことは、Morganの当時の健康状態からすれば、じゅうぶんありえることとも思われる。

### 第3節 TAT 図版の起源

以下に、TAT 図版の起源について知り得たことを、図版番号順に述べていく。

心理臨床実務者にはよく知られていることであるが、図版番号についてひとこと付言しておく。Mの記号がついた図版は14歳を超える成人男性用で、Fの記号がついた図版は14歳を超える成人女性用である。Bの図版は少年用、Gの図版は少女用である。数字の後に何の記号もついていない図版は、老若男女いずれにも適用できるものとされている。

TAT 図版の真の原典はどこにあるのだろうか。当時世に出ていた無数ともいえる絵画や写真

のうちのどれが TAT 図版の素材として借用されたのだろうか。それを明らかにしようとする試みは以前からあったし、事実、何枚かの図版の原典は既に手引書に明記されている。しかし、真の原典が未だに不明であるとされる図版もある。また、今回の調査を通して、古くから用いられていたとされる図版の中にも、古い図版を描き直したものがあることが分かった。

現行の TAT 図版は全て白黒印刷であるが、判明したところによれば、その原典となった絵や写真の多くはカラーである。原典となったものをカラーで見ようというのであれば、それが雑誌や単行本のイラストや挿画である場合には、その原資料に当たればよい。それが美術作品（絵画）である場合には、その絵画のカラーの複製は、それを所蔵する美術館から入手できるものが多い。

なお、あらためていうまでもないことだが、本論文はありとあらゆる資料を調べ尽くした上で執筆されたものではない。ここに論述することが完全かつ無謬なものであるという保証はない。

### 第 1 図版

この絵は、当時たくさん作成された「予備図版群」から選ばれた 1 枚である。

これは、1935 年当時の第 5 図版として使われていたもので (Murray and Morgan, 1935), B シリーズから第 1 図版となっている。

この絵について、手引書 (Murray, 1943/1971) には「D. Morgan によって描かれた」(p. 18) と説明されている。それは、そのとおりである。しかし、その説明では不十分である。

この絵は、実は、バイオリニスト Yehudi Menuhin の子どもころの写真素材として、その一部を Morgan が模写したものである。もともとなった写真の撮影者は Lumiere で、その写真は当時の雑誌「親の本 (Parent's Magazine)」1930 年 1 月号に掲載された。写真は、Block 執筆の記事のイラストとして、17 ページに掲載されている。この写真はまた、メッシュエン社から出版された「人間の音楽 (The Music of Man)」という本にも掲げられている (Menuhin and Davis, 1979, p. 233)。この写真は、Menuhin がサンフランシスコ交響楽団でデビューする前年に撮影されたもので、彼が 6 歳の時に撮られたものであるという (Menuhin and Davis, 1979)。なお、この若き天才バイオリニストのいくつかの写真は、彼の自伝にも載っている (Menuhin, 1977)。

### 第 2 図版

Murray (1943/1971) は、この絵について「Leon Kroll が描いた壁画を、米国司法省の特別許可を得て、複製した」と説明している。だが、これはかれの誤りである。判明したかぎりの事実は以下のようなものである。

壁画や裸婦画で有名な米国の画家 Leon Kroll (1884-1974) は、たしかに司法省に依頼され、ふたつの壁画を描き残している。その壁画は今でもワシントンの司法省庁舎内の司法長官室にあり、「正義の勝利」という題名がつけられている。

(心理クリニックのスタッフらが TAT 図版を取捨選択していたころの) 雑誌「ライフ

(Life)」1938年4月25日号の38ページに「首都の建物のインテリア：大きな執務室で働く小さな人々」と題する記事が掲載されている。その記事に添えて、司法省のくだんの壁画のカラー写真が掲載されている。(クリニックのスタッフらは、このライフ誌の写真からインスピレーションを得たのかもしれない。)なお、この壁画の白黒の写真は、画家 Leon Kroll に関するその他の文献資料にも見ることができる (Hale and Bowers, 1983, 写真図版 158 と 159)。

ところで、TAT の第2図版の中央の男性(畑で馬を連れている)は、たしかに司法省の壁画「正義の勝利」に描かれている男性人物とかなりよく似ている。しかし、この壁画そのものは TAT 第2図版の原典ではないと思われる。なぜなら、司法省に現存する壁画にはその他のたくさんの人物が描かれているにもかかわらず、TAT 図版にある2人の女性に相当する人物を見いだすことができないからである。理由は定かではないが、Murray らは第2図版の出典を明らかにまちがっている。

筆者の調査によれば、第2図版の本当の原典は、Kroll の「岬の朝 (Morning on the Cape)」(1935年作)と題する作品であろうと推定される。この作品は現在、ピッツバーグにあるカーネギー財団美術館が所蔵しており、この絵の白黒写真は「カーネギー財団雑誌第9巻」(1935年発行)に連載されている (O'Connor, 1935, p. 201) ほか、Kroll 関係のその他の文献資料にも見ることができる (Carnegie Institute, 1936, p. 10; Ryder, 1936, p. 68; Lane, 1937, p. 221; Watson, 1939, p. 155)。ただし、いずれも白黒写真である。筆者のこれまでの調査では、この絵のカラー写真は見つかっていない。

この作品の題名にある「岬」とは、マサチューセッツ州にある「アン岬」であり、この岬の風景をテーマにした一連の作品が残されている。TAT 第2図版に見られるさまざまな要素は、岬をテーマにしたそれらの一連の作品の中に見いだすことができる。そのところに描かれた「入江の道 (Road from the Cove)」と題する作品 (Hale and Bowers, 1983; Lane, 1937) に、TAT 図版に登場する人物と同じような人物像を見ることができる。(おそらく「岬の朝」をもとにして、「入江の道」などの作品の一部を切り貼りして、TAT 第2図版は作られたのであろう。)

カーネギー財団発行の「美術ダイジェスト」1936年1月号 (p. 10) によれば、「岬の朝」は、ある春の朝の風景であり、学校へ出かける15歳の少女と妊婦を描いた作品であると解説されている。この作品は、1935年に開かれたカーネギー財団主催・国際美術展覧会に出品され、人気投票で第1位になったもので、同年、カーネギー財団美術品購入基金によって財団が購入した (Lane, 1937; O'Connor, 1935)。

ちなみに、TAT の図版をじっくりと見ると、図版の右下隅に「Kroll」という署名があるのがわかる。

この絵は、Ruesch が TAT 図版として推したものである。

### 第3 BM 図版

Murray (1943/1971) の手引書によれば、この図版も当時の「予備図版群」から選択された

1枚であり、もともとは Christiana Morgan が描いた絵であるとされる。これは、1935年当時は第4図版となっており (Morgan and Murray, 1935), 1938年ころに第13図版となり (Morgan and Murray, 1938), Bシリーズでは第M13図版となっていた。このころの図版は、現行の第3BM図と比べると、描線が明確で、描かれているものがはっきりと分かる。(おそらく、現行図版は、もとの図版を手直しして、輪郭をわざとぼやけさせたのであろう。)

この図版の起源は一体何だろうか。判明したところによると、この図版は、ある写真をもとにして Morgan が絵を描き、それを TAT 図版としたものである。Murray らが手引書でいうような「Morgan のオリジナルの絵画」ではなく、原典となった写真が別に存在するのである。その写真は、マサチューセッツ州ケンブリッジにある Radcliffe College の「ヘンリー・A・マァレー研究センター」のロビーに現存する。その写真は額に入れられ、Morgan の絵と並べて飾られている。(ただし、この写真がどういう経緯で入手されたものかは分からない。)

その写真を見ると、TAT 図版では省略されている細部がよく分かる。例えば、TAT 図版ではカウチは白く描かれているが、もともとなった写真を見ると、カウチの上にはプリント柄の布が掛けてあり、人物の右側には枕が置いてある。また、人物の左側には別の部屋があるようだ。もとの写真の人物はベルトをしておらず、明らかに女性である。興味深いことに、もとの写真では、床の上にあるものは拳銃ではなく、いくつかの鍵をたばねた鍵束である。

### 第3GF図版

この図版は、Bシリーズの第15F図版とほぼ同じものであるが、それをもとにして、Thal が描き直したものである。Bシリーズ当時の図版と現行図版を比べると、女性の手の位置がいくらか変わっている。

### 第4図版

この図版のもともとなった絵は、米国のイラスト画家 Cecil Calvert Beall (1892-1967) が描いたカラーの挿画である。もともとは、ある短編小説の挿絵として描かれたものである。

その小説とは「最高の男の贈り物 (Best Man's Gift)」という題の小説で、原作者は Henry Mead Williams である。小説は、1940年3月23日付け「Collier's」紙に掲載されている。

その小説によれば、図版の左側の男は25歳のロブスター採りの漁師で、名を Orrin Abbott という。Orin の漁師仲間に Grant Foster という男がおり、図版の右側の女性は、その Grant と結婚した新妻の Anza Cole という女性である。この挿画は、Grant の妻である Anza が Orrin に「この次の冬は何をして過ごすの?」とたずねているところであり、Orrin は、人妻となった Anza に対するひそかな恋心を押し隠しつつ、「分からんよ」と顔をそむけている場面である。

TAT 図版では、背後でスカートをまくっている女性が隣室にいる実在の人物のようにも見えるようにぼかされているが、原典のイラストでは、その女性がピンナップに描かれた絵であることがはっきりと分かる。(TAT の手引書には「C. C. Beall のイラストを許可を得て複製」と記載されているが、TAT の図版は、イラストそのものの複製ではなく、若干の修正が施されたこ

とになる。)

この絵は、Wyatt が TAT 図版として推したものである。

#### 第5図版

この図版は、Bシリーズの第2図版とほとんど同じものであるが、それをもとに、Thalによって描き直されていると見られる。Thalによって改変された新しい図版では、女性はもとの図版よりも若く見え、着ているブラウスも変わっている。Thalはまた、壁につけられた本棚とキャビネットの上の本を描き加えている。

#### 第6BM図版

この図版の原画は、Christiana Morganが描いたもので、もともとの「予備図版群」のうちの1枚であった。Morgan and Murray (1935)では第7図版とされ、Morgan and Murray (1938)では第11図版になり、Bシリーズでは第M12図版として使われたものである。先行図版では女性の左側には窓がないが、現行図版では窓が加えられている。

#### 第6GF図版

この図版のもとになった絵は、ある新聞の連載小説の挿画として、米国のイラスト画家Hy Rubin (1905-1960)が描いた白黒のイラストである。その連載小説とは、Agatha Christie原作の「書斎の死体 (The Body in the Library)」(邦訳：高橋豊訳「書斎の死体」1978年、早川書房)という推理小説で、1941年6月7日付け「Saturday Evening Post」紙に掲載された。

もともとのイラストには、登場人物であるAdelaide (Addie) Jefferson, Hugo McLean, Dolly Bantry夫人の3人が描かれている。場面は、HugoがAddieに対して、慎重にふるまうようにと忠告しているところである。もとになった挿画には3人の人物が描かれているが、TAT図版では、その挿画の一部を切り取って使用しているため、Bantry夫人が見えない。

この絵は、WyattがTAT図版として推したものである。

#### 第7BM図版

ほぼ似通った絵が、Bシリーズの第M15図版として使われていた。それをThalが描き直したものが、現行図版である。先行図版に比べると、現行図版では、細部がぼかして描いてある。

#### 第7GF図版

この図版の原典は、米国の画家Anatol Shulkin (1899-1961)の「おとぎ話 (Fairy Tales)」という題の作品である。この絵に描かれた少女はぼんやりと遠くを見ているようであるが、そうした姿の少女はShulkinが好んで描いていたもので、かれの作品にはよく登場する。批評家によると、彼は、モデルに対して、あまり感情を顔に出さないようにとわざわざ指示していたという (Bird, 1938)。

この絵は、1938年12月にメトロポリタン美術館が購入している。筆者の知るかぎりでは、この絵のカラー写真はどこにもない。しかし、白黒の写真は「美術ダイジェスト (Art Digest)」誌1938年11月号に掲載されている。

この絵は，Ruesch が TAT 図版として推したものである。

#### 第 8 BM 図版

この図版のもとになった絵は，米国のイラスト画家 Carl Mueller (1894-1970) のカラーイラストである。現行の TAT 図版では，そのイラストをもとにして，Thal が描き直した絵を用いている。

原画は，「雁の渡り (Wild Geese Flying)」という短編小説 (Hal Borland 原作) のために，Mueller が描いた挿画である。それは，1939 年 11 月 25 日付け「Collier's」紙に掲載されている。

その小説の主人公は，Malcolm という少年である。絵の前景に描かれた少年が，Malcolm である。背景には，町医者をしている父が，メキシコ人の羊飼いに對して，盲腸の緊急手術を施している場面が描かれ，そばには，手術を心配そうに見つめる羊飼いの仲間がいる。小説によれば，医者のお父は既に不治の病に冒されており，息子の Malcolm と雁撃ちの狩猟旅行に出かける。その旅の途中で，父は，病をおして必死の緊急手術をする。Malcolm は，その手術を手伝ったことから，父の志を継いで医師になる決意を固めるという筋書きである。

原画をもとに Thal が描いた絵 (現行の TAT 図版) では，少年は，原画よりもいくぶん幼く見え，面長になっており，しかも背景がぼかされている。Thal はまた，原画の下半分を切り取っている。切り取られた部分には，補聴器や医者のおうかがいなどが描かれ，画家の署名もある。なお，現行の TAT 図版でもライフルが描かれており，Malcolm と父が雁撃ちの旅に出ていることがうかがわれる。

この絵は，Wyatt が TAT 図版として推したものである。

#### 第 8 GF 図版

この図版のもとになった絵は，米国の画家 Frederic Taubes (1900-1981) が描いた油彩画である。題名は「リリー，芸術家の妻の肖像 (Lili, Portrait of the Artist's Wife)」といい，1937 年の作品である。現行の TAT 図版でも，よく見れば，左下隅に作者の署名が見える。

この絵は，現在，ニューヨークのメトロポリタン美術館の所有となっている。現在に至るまでの調査では，この絵のカラー写真を登載した文献が見つからない。(手引書によれば「メトロポリタン美術館の特別許可を得て複製」となっているから，美術館の図録から複製されたのであろうか。) なお，白黒の複製写真であれば，美術雑誌「アメリカの芸術家 (American Artist)」1974 年 7 月号 (p. 33) に見ることができる (Hines, 1974)。

Ruesch が，この絵を TAT 図版として推した。

#### 第 9 BM 図版

この図版の原典となったものは，米国の写真家 Ulric Meisel の「昼寝 (Siesta)」と題する写真である。現行の TAT 図版は，その写真をもとに，Thal が描いたものである。

原典の写真と TAT 図版を比較すると，TAT 図版では無帽の男がいる場所に，原典の写真では帽子を目深にかぶったもうひとりの男が横たわっている。また，原典の写真では，男が身につ

けている革ズボンやカウボーイ・ハットがはっきりと写っているのが、西部のカウボーイたちであることが明らかであるが、図版ではその点がぼかされている。

Meisel のこの写真は、写真雑誌「1942 年版米国カメラ (U. S. Camera-1942)」に掲載されている (月刊誌ではなくて年報の方である。Maloney, 1941, p. 178)。筆者の推測によれば、Murray らは、この写真誌に掲載された写真をもとにして、TAT の第 9 BM 図を作ったにちがいないと思われる。というのは、同誌には TAT 第 13 B 図版のもとになったと思われる写真も載っているからである。

写真の説明によれば、これはテキサス州 Guthrie 付近にある「6666 牧場」で撮影されたもので、Meisel が現代のカウボーイの生活をテーマにして撮影した一連の写真の中の 1 枚である。この写真は、地面に横になったカウボーイたちが、談笑したり、煙草を吸いながら、しばしくつろいでいる昼食後の場面を撮ったものであるという (Maloney, 1941)。

この写真の複製、同じく「昼寝」と題するもう 1 枚の写真 (背景に馬車が見える) の複製、及びその他いくつかの Meisel の写真の複製は、今でも、Monkmeyer Press Photo Service 社から入手できる。

この写真は、Wyatt が TAT 図版として推したものである。

#### 第 9 GF 図版

この図版の原典は、米国のイラスト画家 Harry Morse Meyers (1886-1961) が描いたカラーイラストである。1940 年 4 月 6 日付け「Collier's」紙に見ることができる。このイラストは、同紙に掲載された連載小説の挿画として描かれたものである。

その小説は「インドでの約束 (Appointment in India)」という題で、原作者は Lawrence G. Blochman である (Blochman, 1940)。

この場面は、農園主の妻である Rhoda Curring が浜辺を駆けており、その姿を、地方役人の妹である Virginia Hatton が見つめているところである。現行の TAT 図版でも、その画面の左下隅に、Meyers の署名がわずかに見える。

このイラストは、Wyatt が TAT 図版として推したものである。

#### 第 10 図版

この図版は、B シリーズの第 5 図版とほとんど同じものであるが、D シリーズ用に Thal が描き直したものである。古い図版では、絵というよりも写真のように見え、また、女性の左手の位置が少し異なっている。

#### 第 11 図版

この図版の原典解明については、興味深い経緯がある。

1943 年当時に刊行された TAT の手引書の初版には「第 11 図版と第 20 図版の出典の発見に結びつく情報があれば、どんなものでもお寄せください」という脚注が添えられていた (Murray, 1943, p. 20)。その初版が刊行されて間もなく、Rene A. Spitz から情報が寄せられ、

この図版の原画は、スイスの画家 Arnold Böcklin (ママ) の筆になる「溪谷 (Die Felsschlucht)」又は「竜の棲む溪谷 (Die Drachenschlucht)」という題の絵であるということが判明した (1943 年 11 月 30 日付け Spitz から Murray あて書簡。ハーバード大学図書館所蔵資料)。それ以降、手引書にはこの出典が明記されて今日に至っている。

たしかに、この図版のもとになった絵は、19 世紀のスイスの高名な画家 Arnold Böcklin (1827-1901) の作品である。私の調査によると、この作品は「溪谷の龍 (Drachen in einer Felsenschlucht)」という題であり、1870 年にバーゼルで複製が印刷・出版されている。現在のところ、この絵のカラーの複製写真は見つかっていない。ただし、白黒写真であれば、いくつかの関連資料に見ることができる (Masters in Art: Vol. 7, 1906, p. 93; Schmid, 1919, p. 30; Andree, 1977, Kat. 238, p. 336)。

かつて Böcklin は、濃い霧のたちこめる夜、聖ゴットハルト峠で道に迷ったことがあり、そのときに異常な幻想が次々と心に浮かぶという経験をした。幻想にとらわれた彼の心には、ゲーテの「ミニヨンの詩 (Mignon's Song)」の一節が浮かんだという。その一節とは、次のようなものであった。

知っていますか、あの山を、  
雲間をとおるあの道を?  
霧深く驟馬はとまどい、  
太古の龍が洞に住み、  
切り立つ崖に滝がたぎちる……

(邦訳: 檜山哲彦・生野幸吉訳編「ドイツ名詩選」1993 年, pp. 34-37, 岩波書店)

画家は、その時の幻想体験を想起しつつ、黄昏せまるアルプスの峠ににさしかかった旅人の一団と荷物を背負った驟馬を描いたという。そして、この場面は、突然、恐るべき 1 匹の龍が洞穴を抜け出し、旅人たちに向かって襲いかかろうとしているところであるという。

この絵は、ミュンヘンの Schack Gallery が所蔵している。

## 第 12 M 図

この図版は、Morgan (1938) の第 14 図版や B シリーズの第 M 14 図版に似ている。ただし、現在の TAT 図版は、それらの先行図版をもとに、Thal が描き直したものである。現行図版では、左側の男がベッドの上に膝を置いているように見えるが、古い図版では、その男はベッドのそばのいすに坐っており、寝ている男は上着を着ている。

## 第 12 F 図版

TAT の手引書 (Murray, 1943/1971) によると、この図版は、英国の画家 Augustus Edwin John (1878-1961) の絵をもとにして、Morgan がその絵を模写して作成された図版である。

John は、1920 年から 1925 年ころにかけて、「不思議な仲間たち (Strange Companions)」と題する一連の作品を制作している。そのうちの 1 枚が TAT 図版の原典である。その作品の白

黒の複製写真は、John に関する文献資料に見られる (Bertram, 1923, 17 図)。

Morgan の絵は、その原典とほとんど同じであるが、John の原画では左側の若い女性は首に大きなリボンをつけている。

現在までの調査では、この絵のカラーの写真が掲載された資料を発見するに至っていないし、現在この絵がどこに所蔵されているのも不明である。

なお、この図版は、かつての B シリーズの第 F 11 図版であった。

#### 第 12 BG 図版

この図版の原典は、Harold G. Grainger の撮影した写真であり、1937 年の「カメラ工芸 (Camera Craft)」誌 (通巻第 44 号, pp. 517-524) にある「写真芸術入門: 第 8 回 (Pictorialism for Beginners: Part VIII)」に載せられたものである (Grainger, 1937, p. 521)。

Grainger は、英国の作家兼批評家で、大学講師や裁判官を勤めたこともあり、しかも写真家としても高名であったという多才な人物である。ちなみに、彼は王立写真家協会の準会員であり、後に特別会員となっている。

Grainger は、写真芸術に関する初心者向けの解説シリーズを著しており、そこで使われた写真の 1 枚が、TAT の素材とされたのである。

彼は、同じ風景を題材とした出来の悪いその他の 2 枚の写真と比較しつつ、この写真こそが完成度が高く、バランスもよく、空間の奥行きがうまく表現されていると解説し、この写真が最も優れたものであると述べている (Grainger, 1937)。(この写真がどこで撮影されたものであるかは特定されていないが、) ラッパ水仙の群落が前景にあり、その周りに樹木が茂り、川にはボートが浮かんでいる。もともとの写真では風景そのものがテーマであり、ボートは中景のひとつになっている。しかるに、TAT の図版では、余計な部分が切り取られ、ボートがクローズアップされている点が興味深い。

この写真は、Sanford が TAT 図版として推したものである。

#### 第 13 MF 図版

この図版は、B シリーズの第 F 19 図版によく似ている。ただし、(現行図版では、男が腕で顔を隠しているのに対し、) 先行図版では、男性は両腕を腰にあてて立っているため、その顔の全部が見え、またシャツの胸元がはだけている。先行図版では、机の上に、(現行図版にあるような) ランプと本がなく、その代わりに瓶とひっくり返ったグラスが描かれてある。また、先行図版では、女性の乳房は、(現行図版ほどには) 露出していない。

#### 第 13 B 図版

この図版の原典は、TAT の手引書 (Murray, 1943) によれば、写真家 Nancy Post Wright (ママ) によって撮影された「エイブ・リンカーン・ジュニア (Mr. Abe Lincoln Jr.)」と題する写真であるとされている。たしかに、これは米国の女流写真家の撮影したものであるが、写真家の名前は「Nancy Post Wright」ではない。正しくは「Marion Post」(1910 - 1990) であり、

彼女は結婚後は「Malion Post Wolcott」と名乗るようになった。(理由は分からないが、手引書にある「Nancy P. Wright」は、明らかに「Marion P. Wolcott」の誤記である。)

原典となった写真には、「手斧で切り倒された丸太でできた、古い山小屋。ケンタッキー州のブレシット郡ジャクソン (Jackson, Breathitt County) にて」という説明が添えられており、丸太小屋そのものをねらった写真であることが分かる。撮影の日付は1940年9月であり、農林安全協会 (Farm Security Administration, FSA) という団体から依頼されて撮影したものであるという。

この写真のネガの原板は、合衆国議会図書館の「印刷物及び写真部門」に、今でも保存されている (写真番号: LC-USF 34-55829-D)。マイクロ・フィルムの複製は、「アメリカ: 1935年-1946年 (America: 1935-1946)」という資料集にも見ることができる。ちなみに、農林安全協会 (FSA) 発行の写真集の版元は、Chadwyck-Healy Ltd. 社である。同じ写真が「1942年版米国カメラ (U. S. Camera-1942)」(Maloney, 1941, p. 78) にも掲載されているし、その他の文献でも見ることができる (O'Neal, 1976, p. 75; Hendrickson, 1992, p. 167)。また、この丸太小屋を別のアングルから写した何枚かの写真も、これらの資料に掲載されている。

なお、Marion Post がケンタッキーの山村での撮影旅行中に経験した興味深いエピソードが、彼女の自伝 (Hurley, 1989) やその他の文献資料 (Neace, 1989) に紹介されている。

ところで、原典となった写真は、丸太小屋をテーマとした写真であって、丸太小屋の全体が画面に写っており、少年の姿は小さくて目立たない。一方、TAT 図版では、その写真の四隅を大きく切り取り、小屋の入り口にたたずむ少年だけがクローズアップされている。Murray らは、余計な部分を切り落とし、被験者の視線が子どもに向くように工夫しているのである。そのため、少年を主人公にした空想物語を作りやすくなっている。

最後に、Murray らが、この写真の原著作者の名前をまちがって引用したことについて考えてみたい。(TAT 図版の選定に向けて、たくさんの写真や絵画を収集していたため) 資料が混乱してしまったという不運もあったのだろう。しかし、それにしても、その当時、この写真は世間に広く知れ渡っており、この写真家の作品は当時のいくつかの文献にも採録されている。彼女の作品は、かなり注目されていたのである。この写真こそが彼女のベストの写真であるかどうかは議論のあるところだろうが、これは Edward Steichen の推薦で「1942年版米国カメラ」にも掲載され (Maloney, 1941)、また、彼女自身もこの写真を気に入っていたからこそ、これを当時の写真集 (O'Neal, 1976) にも載せたのだろう。調べてみると、この写真家については、(結婚を機に名前を変えているためもあるが) いろいろな文献で名前の引用が混乱している。それにしても、「Marion P. Wolcott」を「Nancy P. Wright」と誤記するほどの外的れをやらしたのは、Murray らだけである。Murray らは、なぜこれほどの明らかなまちがいを犯したのだろうか。

名前の引用をまちがった原因のひとつは、前述したように、この写真家が結婚を機に改名した

ことにあるのだろう。ちなみに、1940年9月、ケンタッキー州ジャクソン郡周辺で写真撮影をしていたころ、彼女はまだ独身で、その当時の名前は「Marion Post」であった。このころの彼女の作品では、彼女の旧姓が用いられている。彼女は、1941年6月6日に Lee Wolcott と結婚した。そしてその後すぐに、FSA の依頼で撮影した作品に付された名前を「Marion Post Wolcott」に変更するように求めている (Hendrickson, 1988, 1992; Hurley, 1989)。この名前の変更によって、その後いくつもの文献で彼女の名前の引用が混乱したのであろう。

実は、「1942年版米国カメラ」にある解説で、この写真の原作者の名前は「Nancy (ママ) Post Wolcott」と誤記されているのである。これを見た Murray らが、「Marion」と「Nancy」を取りちがえたことはありうることである。おそらくそうであったのだろう。(それにしても、「Wolcott」と「Wright」と取りちがえたのは、なぜだろうかという疑問は残る。)

「1942年版米国カメラ」では、作品の題名も「Mr. Abe Lincoln, Jr.」となっており、FSA の資料でのもとの題名(「丸太でできた、古い山小屋」)とは異なっている。「1942年版米国カメラ」の解説にはまた、「FSA の依頼により、写真家ウォルコット夫人 (Mrs. Wolcott) は、ケンタッキー州プレシット郡に住む人々の孤独で貧しい暮らしぶりを取材し、その典型例として、この写真を撮影した」(Maloney, 1941, p. 78)と書かれている。なお、付け加えておくと、この写真はまた、「The Post Standard of Syracuse」紙の1941年12月7日付け日曜版のグラビア欄にも転載されており、そこでも「Mr. Abe」という題になっている。

再び、話を写真家の名前にもどそう。結論として、「1942年版米国カメラ」が「Marion」とあるべきところを「Nancy」と誤記した最初の文献であったと推定される。その誤記がそのまま Murray らの TAT 手引書に受け継がれたのであろう。Murray らが「1942年版米国カメラ」に依拠したことは確実である。なぜなら、同誌には TAT 第9 BM 図のもとになったと思われる写真も掲載されているからである (Maloney, 1941)。とはいうものの、TAT の手引書 (Murray, 1943/1971) で、「Wolcott」とあるべきところが「Wright」と誤記されている理由は、結局は分からない。

### 第13 G 図版

この図版のもとになったのは、日系米人の写真家 Hisao E. Kimura が撮影した「屋上庭園へ (To Roof Garden)」と題する写真であり、写真雑誌「アメリカン・フォトグラフィ」誌 (1934年1月発行) に掲載されたものである (Kimura, 1934, p. 11)。

TAT の手引書で、Murray は、ここに描かれた女性を「小さな少女」と解説し、この図版を G 図版 (少女向け図版) に指定している。しかし、実際には、この女性は子どもではなく、成人女性である。写っている女性は写真家自身の奥さんで、名前を Chieko Kimura という (1993年4月30日付け S. Kimura の私信)。(Murray が「少女」と説明しているのはまちがいである。小柄な日系夫人を、彼は「少女」と見てしまったのである。)

この写真を撮ったころの Kimura はアマチュアではあったが、「カリフォルニア日系写真芸術

家協会 (Japanese Camera Pictorialists of California)」や、ロサンゼルスの写真家クラブの会員であった (Reed, 1985)。

この写真は、Sanford が TAT 図版として推したものである。

#### 第 14 図版

この図版は、Morgan が描いた絵であり、初期の「予備図版群」のうちの 1 枚であった。これは、Morgan and Murray (1935) では第 6 図版とされ、B シリーズでは第 4 図版とされていた。

#### 第 15 図版

この図版の原典は、米国のイラスト画家兼作家 Lynd Kendall Ward (1905-1985) による木版画である。彼が書いた「狂人のドラム：版画小説 (Madman's Drum: A Nobel in Woodcuts)」(Ward, 1930) という本に載っている。その本は、このジャンルの 6 部作のうちの第 2 部である。この小説は、全編木版画で構成されている特異なもので、読者は版画を順に見てゆき、自分なりに物語の筋を空想するのである。この本にはページ番号がふられていないが、TAT 図版に採用された版画は、116 枚目 (最後から 3 枚目) のものである。なお、この版画は、彼の「ことばなき語り部 (Storyteller without Words)」という著作にも再録されている (Ward, 1974, p. 121)。

「狂人のドラム」の初版は、1930 年、ニューヨークの Jonathan Cape and Harrison Smith 社とロンドンの Jonathan Cape, Ltd. 社から出版された。TAT の手引書 (Murray, 1943/1971) では、出版年が「1938 年」となっているが、これはまちがいである。

作者自身が「ことばなき語り部」と題する著作 (Ward, 1974) で解説しているところによると、「狂人のドラム」という作品は、100 年以上昔の、とある外国を舞台にした小説で、普遍的な人間関係をテーマにしたものであるという。彼の版画小説の第 1 作「神のしもべ：版画小説 (God's Man: A Novel in Woodcuts)」(Ward, 1929) は、評判が良かった。話の筋がずっとわかりやすかったからである。(おそらく、この好評に自信を得たことから、彼は版画小説を連作したのであろう。しかし、その後の作品は評判が芳しくなかったようである。)「狂人のドラム」は、例えば「Burlington Magazine」誌 (1931 年、通巻 59 号) の書評で取り上げられているが、評論家の E. P. 氏は「版画をじっくり鑑賞することと、物語の筋を追うことは二律背反するから、この小説は失敗作である」と酷評している (E. P., 1931)。

#### 第 16 図版 (空白図版)

空白図版を TAT に採用すべきか否かという点について、どのような議論がなされたかはよく分かっていない。空白図版は、少なくとも B シリーズでは採用されていなかった (Rapaport et al., 1946; White et al., 1941)。しかし、TAT 研究の初期のころから、空白図版は用いられていたようである。なぜなら、1938 年に刊行された「人格の探求」の中で、TAT 技法の活用に関する「その他の質問事項」として、次のようなやり方が記述されているからである。

「テスターは、被験者に、TAT 図版と同じ大きさの真っ白なカードを手渡して、次のよう

に教示する。「この真っ白いカードを見つめてください。そこに何か絵が描いてあると想像してみてください。……（少し間をおいて）……では、あなたが見たものを説明してください。」……」（Murray, 1938, p. 407）。

（このことから、1938年当時既に、空白図版がTATの1枚として用いられていたらしいことは分かる。ただし、空白図版を最終的にTAT 31枚のうちの1枚として採用するという決定がどういう経緯でなされたかということは、未解明の問題として残っているというべきであろう。）

#### 第17 BM 図版

手引書の解説（Murray, 1943/1971）では、この図版は「Daumierの未完のスケッチをもとに、Thalが描いた絵」であるという。

たしかに、フランスの漫画家・リトグラフ画家・油彩画家であるHonoré Daumier（1808-1879）は、「結び目のあるロープにすぎた男（L'Homme à la Corde à Noeuds）」と題する作品（制作は、1860-1862年ごろ）を残している。これは、カンバスに油彩で描かれたものである。ある美術批評家よれば、「（画家の）失意と悲しみの時代」（Rey, 1985）に制作された作品であるという。この絵は、現在ボストン美術館に所蔵されている。この絵のカラーの複製写真は、この画家に関する文献（Rey, 1985, p. 99）にも見ることができる。

この絵に描かれた人物は、TAT図版の人物と酷似している。（したがって、この油彩画がTAT図版の原典とされたことは、まちがいない。）

それにしても、この絵が、はたしてMurrayがいうように「未完の」、「スケッチ」であるかどうかは疑問である。（もとの絵は題名のついた作品として残されており、しかも「スケッチ」ではなく、油彩画である。したがって、Murrayの記述は不正確というべきであろう。）

この絵が最初に用いられたのは、Morgan and Murray（1935）の第10図版としてである。3年後のMorgan and Murray（1938）では第16図版となり、その後のBシリーズでは、やや改変されたらしい絵が第M 16図版となっている。

これらの先行図版をもとにThalが描き直したのは、その後のことと思われる。そして、そのThalの絵が現行の第17 BM図となった。初期のいくつかの図版では、Daumierのオリジナルの油彩画と同様、人物の細かい表情がはっきりと描かれていない。Thalが描き直した現行図版の方が、むしろ表情がはっきりと見て取れるように描かれている点が興味深い。

#### 第17 GF 図版

この絵も、第16図と同じく、「狂人のドラム：版画小説」（Ward, 1930）から引用された版画である。すでに述べたように、この本にはページ番号も図版番号もないが、この図版は最初から71枚目のものである。この版画は、同じ作者の別の作品「ことばなき語り部」にも再掲されている（Ward, 1974, p. 106）。

この絵は、以前のBシリーズでは第F 12図版であった。

ところで、この「版画小説」なるものの原作者自身が、心理学でいう「投影」の機制と同じよ

うなことを述べていることは興味深い。作者によれば、版画小説を「読む」とき、読者一人ひとりには自分の過去の経験を総動員してその絵を「理解しようする」、そして、一人ひとりが「独特の意味づけを発見する」、かくして絵物語の読み手は、「自分独自の物語を作っていく」という (Ward, 1974)。

#### 第 18 BM 図版

この絵は、Morgan が描いた初期の「予備図版群」の 1 枚である。この絵は、Morgan and Murray (1935) の第 12 図版や、Morgan (1938) の第 12 図版に似ている。(しかし、若干、改変されているようである。)

この当時の説明には、「2 本の手が若い男性の背後から伸び、男性はつかまえられている。背後の敵の姿は見えない」という記述が見られる (Morgan and Murray, 1935, p. 297)。「2 本の手」についての同じような記述は、White ら (1941) の文献にも見られる。(このころの図版には「第 3 の手」はなかったのであろう。したがって、現行図版にある「第 3 の手」が描き加えられたのは、1941 年以後 1943 年以前と推測される。それにしても、なぜ「第 3 の手」が描き加えられるのだろうか、という疑問は残る。)

現行図版は、B シリーズの第 M 12 図版と酷似している。けれども、男が外套を着ている点が異なっている。B シリーズやそれ以前の図版では、男は外套を着ていない。

#### 第 18 GF 図版

この絵は、B シリーズの第 F 17 図版をもとに、Thal が描き直したものである。

当時の心理クリニックのスタッフであった Robert Holt の証言によれば、「Morgan が B シリーズのためにこの絵を描いたとき、何か参考にしたものがあつたようだったが、思い出せない」(1994 年 3 月 2 日付け R. R. Holt の私信) とのことである。

先行図版では、階段の手すりに押しつけられている女性は柄模様のドレスを着ており (現行図版では無地のドレス)、彼女の首を手で締めつけている女性は (現行図版の女性よりも) 若く見える。なお、古い図版では、階段の踏み段は見えない。

#### 第 19 図版

この絵は、米国の画家 Charles Ephriam Burchfield (1893-1967) が描いた「夜の風 (The Night Wind)」という題の絵である。原画は、水彩とグワッシュを用いたものであり、1918 年に制作された。この作品は、「チャールズ・バーチフィールド: その作品の施設蔵・個人蔵別図録 (Charles Burchfield: Catalogue of Paintings in Public and Private Collections)」の第 416 図に見ることができる (Munson-Williams-Proctor Institute, 1970)。

この作品は、もともとは個人が所蔵していたものである。手引書に「A. Conger Goodyear 氏の許可を得て複製」と記載されているが、その Goodyear 氏が、もともとの所有者である。そのことは前記図録にも記されている (Munson-Williams-Proctor Institute, 1970; Murray, 1943/1971)。

なお、この絵の白黒の複製写真は、1930年4月11日-26日にニューヨーク近代美術館で開催された「バーチフィールド初期水彩画作品展」の図録にも収められている (Burchfield, 1930, No. 26)。その後、この絵は所有者から同美術館に寄贈されたらしい。

図録の説明によると、この絵のモチーフは、オハイオ州セイラムに住んでいた画家の住居の隣にある家である。怪物や奇妙な幽霊のようなものが飛び交っているように見えるが、これらは、画家が子どものころに見た幻想にインスピレーションを得て描かれたという (Burchfield, 1930)。

Burchfield は、この絵のもとになったと思われるメモ (1916年9月22日付け) を書き残している。そのメモには、「南西から吹く強い風、ぎざぎざの切れ目があり奇妙な生き物のようにも見える黒い雲、悪意を含んだように黄色く光る窓、そして周囲には猛禽の爪のような枝を伸ばした黒い木々、……」などと記載されているという (Townsend, 1993)。

その年、彼はひどい抑うつと幻覚に悩まされていたという。このころの Burchfield は「抽象的想念の寄せ集め (Conventions for Abstract Thought)」と題するノートを書いており、そこに何枚かのスケッチを描いている。その中で、彼は、「不安」、「狂気」、「迷い」、「ぞっとするような恐怖」、「愚かしい思念」などといったさまざまな気分や異常な精神状態を象徴的に表現するために、いくつもの抽象的な図形を描きためている。研究者らによると、きりきりと心に食い込む「不安」は、「渦巻く強い風」によって表現されている。目の部分を白くくり抜いた「暗夜の仮面 (mask of night)」は「無知」や「愚かさ」を象徴している。そして、奇妙な窓の形は「心のやまい」や「邪悪さ」を暗示しているという (Baur, 1956 a; Townsend, 1993)。

「夜の風」は1918年の制作であるが、異常な精神状態を象徴的な形で表現しようとする試みは、その前年の「冬の雨夜の教会の鐘 (Church Bells Ringing, Rainy Winter Night)」(1917年制作) にも見られる。「夜の風」と「冬の雨夜の教会の鐘」は、美術評論家 Baur による「バーチフィールドの初期水彩画における幻想とシンボリズム (Fantasy and Symbolism in Charles Burchfield's Early Watercolors)」と題する論文 (芸術四季報 (Art Quarterly) 第19巻, pp. 30-40 所収) にも採録されている (Baur, 1956 b)。

さらにいえば、「夜の風」は、1946年にマンハッタンで開催された作品展に出品された「吹雪 (The Blizzard)」ともよく似ている。この作品展については、「タイム (Time)」誌1946年1月21日号に時評が載っている。

「夜の風」は、Wyatt が TAT 図版として推したものである。

## 第20 図版

この写真は、Sanford が TAT 図版として推したものである。

手引書には、この図版の説明の脚注として、以下のことが記載されている。こうした脚注が、TAT の初版以来50年以上も手引書の中に残されていることは興味深いことである。

「この図版のもとになった写真を探し出すために、我々は、雑誌や本の検索に多大の時間を

費やした。(しかし、ついに出典を明らかにすることができなかった。) 科学的な目的のためとはいえ、著作権者や出版社の許可を得ないままに、これを TAT として使用することとなった。我々は関係各位の寛容と善意を信じたいと思う。なぜなら、これまでのところ、TAT 図版のもとになった絵や写真の著作権者はどなたも、その原画を心理検査に転用することを快諾されたからである。なお、図版 20 の原画の発見に結びつくどのような情報でも、お寄せいただければ幸いである。」(Murray, 1943/ 1971, p. 20)

私の調査によると、この図版のもとになった写真は、写真家 Dushan が撮影した「公園にて (In the Park)」という題の写真である。「ミニカム (Minicam)」誌 1938 年 1 月号の 14 ページに見いだすことができる。Dushan が執筆した「霧——それは味方か敵か (Fog —— Friend or Foe?)」という記事に添えられた写真である。その記事は、悪天候でも写真を写すことができるという趣旨を述べたものである。くだんの写真は、霧の中でハレーションを起こさずに光源を含む被写体をうまく撮影できることの実例として示されたものである (Dushan, 1938)。

注目すべきことに、TAT の第 20 図では、もとの写真の上下がかなり切り取られ、被験者の眼が中央の人物像へ向くように改変されている。ただし、その他は原画のままで、これといった修正はなされていない。

#### 第 4 節 結 論

現行の TAT 図版には、D シリーズ制作時に全く新しく採用された図版はない。多くの図版は、(若干の修正があるにせよ) D シリーズ以前の先行図版から引き続き使用されているものであった。

今回の調査によって、初期の「予備図版群」に含まれ、Morgan によるオリジナルの絵と思われていたものにも、その原典のあることが明らかになった。手引書には「Morgan による」とされている図版は、必ずしも彼女の想像力のみから生み出されたものではなかったのである。第 1 図版は、バイオリニスト Menuhin の子どものころの写真を模写したものであった。第 3 BM 図版は、出典がはっきりしないが、ヘンリー・マッレー研究センターに展示されている写真からイメージーションを得たものであった。また、第 12 F 図は、英国の画家 Augustus E. John が描いた絵を少し手直ししたものであった。現在のところ証拠はないが、その他の Morgan 作とされている図版にも何らかの原典となる写真や絵画があった可能性があるといえよう。

同様に、Thal が描いたとされる図版も、先行する試行図版を書き直したり、その当時の画家や写真家の作品を模写したものであることが分かった。例えば、第 9 BM 図は、Thal による絵ではあるが、写真家 Meisel が撮った「昼寝」という写真を素材にして描かれたものである。

また、その他の TAT 図版は、当時の雑誌や本にある絵、写真、イラストなどから複製・転用したものであることが分かった。

D シリーズの図版ができあがった時点で、既に図版の半数以上は Thal 又は Morgan が描いた

か、あるいはかれらが何らかの原画をもとに手直したものであった。このふたりの筆による図版が多いために、31枚のTAT図版の全体の調子は、(初期の寄せ集めの試行図版に比べると)かなりまとまった印象を与えるものになった。(というよりも、Murrayは、31枚のTAT図版にある程度一貫した印象をもたせようという意図から、ThalやMorganにわざわざ描き直させたというべきだろう。ちなみに、現行図版において、空白図版を除く全30枚中、Thalによるものが10枚、Morganによるものが6枚である。)もともとの絵や写真の多くがカラーであるのに対し、TAT図版ではそれらが全て白黒に統一されている。このことも、TAT図版全体の調子を、まとまったものになっている。

また注目すべきは、原画の典拠についてのMurrayらの説明がきわめて簡略で、しかも不正確であるということである。先行シリーズでは、選択された図版の出典には全く触れていない。それに比べれば、Dシリーズを作成するに当たって、図版の出典を明らかにしようとしている点は、一応は評価されよう。TAT開発の初期の段階において、もともとの原典を軽視していたことは無理もないといえるだろう。ハーバード大学心理クリニックのスタッフは、新しい投影(映)法を開発しようという意気込みで、多数の絵や写真を収集し、それらの出典などにはいちいち注意を払っていなかったであろう。原画の出典にこだわることなどは、かれらにとっては些事であったろうし、出典の記載は、検査が完成した後、だれかがやればよいと考えていたのかもしれない。

もともとの素材をさまざまに改変し、Dシリーズ用の図版を作成していく過程を振り返って見ると、当時のかれらが考えていたことがよく分かる。かれらは、しばしば、原図の細かなところや複雑なところをそぎ落としてしまい、図版の「あいまいさ(ambiguity)」を高めようとしている。そこには、図版のいわゆる投影力を高めようという意図が働いていたにちがいない。(あるいは、原画の余計な部分を切り落として被験者の目が特定のものに向くようにしたり、輪郭をわざとぼかすなどの工夫をしている。これらも、投影力を高めようという意図からなされたであろう。)

いずれにもせよ、かくして出来上がったTAT図版は、世に出るやあまねく知れ渡り、現在に至るまで50年以上の長きにわたって、有用な心理検査として活用され続けているわけである(Piotrowski and Keller, 1978, 1989; Piotrowski, Sherry, and Keller, 1985; Sweeney, Clarkin, and Fitzgibbon, 1987)。

#### [謝 辞]

本論文の一部は、1991年3月23日、ニューオーリンズで開かれた南東部地区アメリカ心理学会第37回年次大会で発表されたものである。

ハーバード大学文書館にある「Henry A. Murray 資料」を検索することを許可していただいた、Caroline C. (Nina) Murray 夫人に深く感謝する。また、本論文の草稿に目を通

齊藤，浦田：マッレー版 TAT 図版の起源についての一考察

すとともに，有益な示唆をしてくださった Robert R. Holt 氏， Morris I. Stein 氏，及び Saul Rosenzweig 氏にも深謝する。

1998年3月30日 受理